
闇の中の住人

樋口裕子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の中の住人

【NZコード】

N4718A

【作者名】

樋口裕子

【あらすじ】

博物館に飾られた一枚の絵に秘められた悲劇。殺したのは誰？その瞬間恐怖のフラグがオンになる。

せつかくママにはかせてもらったパジャマのズボンがずり落ちるほど、

ボウヤはベットで暴れます。

ママの怒る声など屁のカッパ、ボウヤはまだまだ寝たくありません。
「しようがない子ね、おまえが早く起れるようママがお話を聞かせてあげましょう。

悪い子はだあれ? ホラ、みんなが探しに来ますよ

「悪い子ってどんな子?」

「こつまでも眠らない子供のことよ」

「みんなってだれ? ボクの知っている人?」

「いいえ、それは私達とは別の世界に住んでいる人達よ。

彼らはいのちの世界にものすこべ興味があるの。

静かにしないと見つけられてしまふからね

「見つけられたらいつなるの?」

「それはわからないわ、とても恐ろしいことになるわつよ。

でも、心配いらないわね、つかこは悪い子なんていないもの。

「あ、もうお話を始めていいかしら？」

「クンとボウヤはひなずいて神妙な顔でママのお話を聞きました。

ある学者が二匹の猫と一緒に暮らしておつまました。

猫の名前は「ブ・フ・ウ」。

もう一年も一緒に暮らしていくのに「ブ・トフ」だけが仲良しで、

ウ・せこつも独りぼっちで寂しそうでした。

学者はウ・を不憫に思い、こつも膝に乗せて可愛がりました。

ある日「ブ・フ・ウ」が大喧嘩をしました。

まあ猫同志の大喧嘩は仕方ありません。もともと仲の悪い二匹と一緒にいたのです。

いつかはことなると学者も困っておつまました。

でも、喧嘩が始まると前に「ウ」が見せた顔は学者ことになりました。

「ウ」はカウンタの上に乗つていて、下では「ブ」と「フ」がじやれあっていました。

学者は入れたばかりの口・ヒ・を飲みながら、何気なしにウ・の後ろ姿を見ています。

その時ウ・がゆっくりと振り向きました。それはとても悲しい顔に見えました。

まるで今から殺するかのような思い詰めた顔でした。

そして次の瞬間ウ・はブ・とフ・の寝てこむといひに飛び下りたのです。

たちまち二匹は丸いボ・ルになり、あたり一面に毛が舞い上がりました。

もし学者が止めに入らなければ、二匹は死ぬまで噛み合ひを止めなかつたでしょう。

それはただウ・が飛び下りる場所を間違えただけなのかも知れません。

でも、学者には確信がありました。

ウ・はいつも独りぼっちで、ブ・とフ・が仲良くなるのを羨ましく思っていたに違いありません。

どんなに寂しかったことでしょう。

「ボクもう決めたんだ、あいつらの中に飛び込んでやる。それで死んでもかまわない。」

だつてこのままじゅ辛いんだもの」

そんな言葉がウーの皿から聞こえてきたのです。

そしてそれ以後、ブ・トフ・は、ウ・が側を通つても唸らなくなりました。

たぶんウ・の決死のダイブで、皿がウ・の存在を認めたのでしょうか。

あつ、二つの間にかボウヤは罷つたようですね。

それでは続きはまた明日。

ママは静かにボウヤの部屋の明かりを消しました。

(一)夜皿のお話

今夜のボウヤはとてもおうれしかった。歯もむしゃんと磨いて、パシヤマも自分で着て

ベジータの母ママが来るのを待ちました。

やがて、一ノ一二三顔のママが現れて、お話を續きました。

ある田学者はテレビを見ながら、晩の御飯を食べていました。

画面では今問題になつてこる牛肉を安全に食べるにはどうすれば良いかを話し合っています。

ここ数年の間に恐ろしい病気に冒された牛が増え続け、

それを食べた人間もその病気にかかつて死んでしまうのです。

病気は牛だけでなく、豚はもちろん鶏にまで発生しました。

画面に牛の顔がアップになりました。

そして次の場面は天井からつるされた牛肉です。

学者は顔をしかめ、チャンネルを変えましたが、

今度は悪いことにバ・ナ・で焼き殺される鶏が映りました。

学者の食欲は完全になくなってしまいました。

食事時にこのよつなものを放送するテレビ局にも腹が立ちましたが、

それよりもいつまでも肉食に固執する人間に一番怒りを覚えました。

学者はベジタリアンだったのです。野菜しか食べません。

膝の上のウ・に学者は言いました。

病気になつた牛の肉を改良する研究をするよりも、

肉を食べないですむ研究をするべきだと思わないかい？

ウ・は頭をちょっと横に傾けて学者の顔を見上げておりました。

学者は両手を上に延ばし、大きなあぐいをしました。

もうすでに、ブ・ヒ・は猫用の籠に入つて寝ています。

学者はウ・を抱いてベッドに入りました。

独りぼっちは学者も同じ、家にいるときはウ・と二つも一緒にです。

ところが、その夜から学者は悪夢に悩まされるようになりました。

寝付いてすぐ、誰かにじっと見られているような気がするのです。

それも一人ではないよくな・・・。

ブ・ン、ブ・ン、ブ・ンという低い音まで聞こえました。

まるで錆び付いた古い扇風機が回っているような音です。

「ママ・、怖こよ・。眠れなくなっちゃったよ・

「まあ、それは大変、ごめんなさいね。でも、これは大切なお話な
の。

今日はここで終わるけど、明日もまた続きを聞いてね」

ママは「一二一」笑つてボウヤの頭をなでながら、やせこ声で言
いました。

「うん、わかった。明日も聞くよ。だけど、あんまり怖く言わない

「ね

ママせコシクこいつなびこい、ボウヤとゆびつぱんまんをしました。

(三夜の話三)

お話を続きを聞きたいけれど、ボウヤはちょっと不安です。

もつと怖い話を聞いたりひつゝ、今度は本当に寝れなくなってしまします。

ベッドの中でキミながらボウヤママを待ちました。

学者が怖い夢を見たんだつたところから、ママの話が始まります。

学者が眠り始めるとき暗闇の中からブ・ン、ブ・ン、ブ・ンといふ音が聞こえてきます。

それはお腹の底まで響いてへんな嫌な音でした。

しかも毎日少しづつ大きくなっています。

学者は耳栓をして寝てみました。

でも、そんな物なんの役にもたちません。

朝になると学者の床の下に囁が出来ておつきました。

通りの家政婦さんが来て、その顔を見てとても驚きました。

お医者様に診てもひつたまうがいいと、しきりに勧めましたが学者は返事をしません。

突然洗面所に立て籠もり、中からカギを掛けてしまいました。

家政婦さんがドアをバンバン叩いて開けるよつに言つてましたが返事をしません。

中ではカチャカチャといつ音がして、やがて苦しそうな唸り声が聞こえてきました。

家政婦さんは救急車を呼ぼうとしましたが、やつとドアが開きました。

でも、中から出て来た学者を見て家政婦さんは氣絶するかと思つてへりこびました。

学者の耳がありません。

耳があつた辺りから赤黒い血がドクドクと流れ、床は血だらけです。

タオルを取りに中へ駆け込んだ家政婦さんは、

洗面台の上にある、血溜りの中に落ちてて、カニソコと、

切り落とされた二つの耳を見てまた悲鳴をあげました。

「ママ、学者は耳なくなつやつたの？」

ボウヤは自分の耳までなくなる気がして、耳を両手で隠しながら言いました。

「いいえ、大丈夫。切った耳をもう一度くっつける手術をしたからね。

でも、一人で放つておくとまた切っちゃうかもしれないから入院することになったのよ」

ボウヤは不思議でした。動物のことを思ひやるやそじい学者が、どうして怖い夢を見るようになったのか。

「Jのお話には理由があるの。それはね、学者が何の学者だったか、なの」

「何の学者だったの？」

「彼は昆虫学者だったの。

アマゾンの奥深くに棲むめずらしげな昆虫を捕つてきては標本にしていたの。

そしてその標本が壁にいっぱい飾つてあったのよ」

「あっ、パパと同じだ。何だパパのことだったの？じゃあパパも耳を切るのかなあ・・・

わおっ！大変だ助けなきや」

「いいえ、これはお話よ。パパじゃないの。パパは耳を切らないわ」「ふうん、そうなの。パパじゃないなら安心だけど、でも変だよ」の人。

動物殺すの反対だったんでしょ、お肉もたべないしどうしてこんな酷いめにあつたのかなあ。

それって、いい子にしても怖いめにあつたことなのかなあ。
・・嫌だなあ

ママはちよっぴり悲しそうな顔をして首を横に振りました。

「ボウヤ、昆虫の標本どうやって作るか知ってる?.

「うふ、パパのを見てたから。あつ、わかつた虫を殺したからなんだね、

虫が怒ってるんだ

ママは寂しそうに笑つてうなずきました。

ボウヤの家の中にはパパが作った昆虫標本がいっぱい飾られてありました。

お話の中の学者の家にもきっとたくさんの標本が飾られてあったこ
違ひありません。

闇の中に光る田は、虫の体に田の光が反射していたとも考えられます。

ブ・ンとこう音は虫の羽音でしょう。

そしてそれは、多分本人にしか聞こえいなかつたのだと思います。

学者はテレビで牛や鶏が殺されるシ・ンを見てから悪夢を見るようになりました。

つまりその時、学者の潜在意識下にあった、

殺した昆虫達への罪の意識に対するフラグがオンになつたのです。そして昆虫を殺す行為と、牛や鶏を殺す行為がシンクロしてしまって、結果、血に口を下すショーティングを迎へてしまつたのです。

ママが暗い顔をして黙つてゐるので、ボウヤは心配になり何か言おうとした。

その時

「じつ・静かに・・・」

ボウヤの口をママが押さえました。

たちまちボウヤの胸で心臓が早鐘を打ち始めます。

ザワザワと大勢の人の足音が近づいて来ました。

(一年前の事件)

午前十時。博物館が開館して、ドアの向こうで長い列を作つて待つていた人達がゾロゾロと入つて來た。

展示されているのはウイル博士が世界中から集めためずらしい昆虫と絵だ。

昆虫博士ウイルは画家としても有名だった。

色とりどりに光り輝くコガネムシはまるで宝石のよう、

大人の手のひらよりも大きい蝶は美しいブルーの羽を広げている。

標本も素晴らしいものだったが、大自然の中で生きている虫達の絵は、

見ている者が吸い込まれてしまつ錯覚を覚えるほど出来栄えだった。

博物館の広いフロア - がたちまち人でいっぱいになる。

そして、たくさんの絵の中で一枚だけ違う絵があった。

ベットの中でも眠れない子供に、母親がお話を聞かせている絵だ。

その絵を見ている一人の男に、

随分と着古した灰色のトレンチコートを着たがつしりとした体躯の男が話しかけて来た。

「これはウイル氏の奥さんと息子さんですね。

とても家族を大切にしておられた」ことが伝わってきます

「ええ、モリ・と息子のジョンです。ウイルは一人をとても愛していました・・・」

男は遠い目をして沈んだ声で答えた。

「失礼ですが、ウイル氏のご親族の方ですか

「いいえ、でも私とウイルは仕事仲間であり、親友でした」

「ああ、そう言えば何度もあなたをお見掛けした記憶があります。

私はあの事件の担当になつた市警のハリソンです」

ハリソンは胸ポケットから警察証を出して見せた。

「ああ、警部でいらっしゃるんですか。私はウイルと同じ大学で助教授をしております

クリストファー・ベインと言います。クリスと呼んでください」

クリスはウイルとおなじ四十オ、ハリソンも同じくらいに見えた。

ただ警官という仕事柄なんだろうが、笑顔の中にも隙がない。

クリスの顔に警戒心が現れた。

ハリソン警部はクリスの顔を伺いながら話かけてくる。

「一年前のクリスマスの夜でした。

私の出くわした事件の中でもそういう例のない酷い現場でしたよ。あんな小さな子供の喉まで切り裂くなんて人間のする」とではあります

りません」

クリスの顔色が悪くなつたのに気がついたハリソンは

「ああ、嫌な事を思い出させてしまいましたね。

すみません」「うつ場所で言つべき言葉じゃなかつた。あやまります」

そう言って頭を下げる。

「いえ、本当に許せないことです。ジョンは可愛い子供でした。

私はよくジョンと遊んでやりました。モリ・モ・・・ややこして・・・賢い・・・」

クリスは言葉を詰まらせ、親指と人差し指で皿を押さえ下を向いた。

ハリソンは、親友一家を襲つた不幸にむせび泣くクリスの肩を軽く叩き慰めた。

「クリスさん・・・私はなんとしてでも犯人を挙げてみせます。

ウイル氏には「親戚がいらっしゃらないんでしたね。

奥さんの「両親も病氣で亡くなっています。

ウイル氏は本当に一人になってしまったわけです。

あなただけが頼りなんですから、どうか力になつてあげてください。

ところでウイル氏の容体はいかがですか

「モリ・ジヨンが亡くなつてから彼一人になりましたからね、

私もよく顔を見に行つてたんです。

通いですが家政婦さんも来ててくれていましたし、

猫を三匹飼つて精神的にもだいぶおちついてきたと思つていたんですが、

耳を自分で切り落とすなんて思いもしませんでした。

家政婦さんが来ている時でよかつたです。

もし誰もいない時だつたら死んでいたところです。

猫ではどうにもなりませんからね」

「そうですね。それで今はどなたがウイル氏の財産を管理なさいているのですか」

「私です。財産といつてもこの標本類と家の面倒をみればいいわけですから。

ウイルは入院していますが、今にきっと良くなつて退院してきます。

その時に一緒にいてやりたいと思こますので今日からウイルの家に住む予定です。

彼が生きている間は決して売却をせません。彼にとって思い出のある家ですからね」

どこまでも友達を思うクリスの言葉にハリソンは胸が熱くなつた。

堅い握手をして、まだ館内を見て回るというハリソンと別れ、

クリスは降り出した雨の中傘もささずウイルの家に向かつた。

彼の荷物がもう届いている頃だ。

荷物は予定通り届いていた。

と言つても一人暮らしだった彼にそれほど荷物はない。

洋服と下着類、あとはちょっとした小物くらいだ。

生活に必要なものはすべてこの家にそろっている。

リビングに行くとソファ - にウ - が寝ていた。

彼が横に座つても知らんぷりしている。

彼は何度もこの家を訪れていたから猫達とも顔見知りだ。

「おいつ、ウ - 。今日から俺がご主人様だ、よろしく頼むよ。
ちまつたからな」

クリスはウ - に向かってしゃべり始めた。

ウ - は耳を立てているが目は閉じている。

「あいつが悪いんだ。俺もモリ - のことが好きだった。

いや、俺のほうが最初に声を掛けたんだ。

それなのにあいつが横取りしゃがつた。

モリ - は大学の側にある食堂でウエ - トレスをしていたんだ。

ポニ - テ - ルのよく似合つ可愛い娘だった・・・

俺を選んどけばあんな死に方しなくてすんだんだ

クリスは一瞬暗い顔をして下を向いたが、

やがて肩をふるわせ痙攣を始め、

ソファにふん反りグラグラと笑い始めた。

「あいつモリ・と結婚したとたん運が向いて新種のカブト虫の交配に成功して

博士号まで取りやがつたんだ。

俺はしがない助教授で嫁の来てもありやしない。

やつてられんよまったく。

モリ・は殺すつもりはなかつたんだ。

あいつの研究データを盗んで学会で恥をかかせてやりたくてよ、すんでのところでモリ・に見つかった。

するとあいつことがこの俺に向かつてドロボ・とわめきやがつた！

頭にきて何が何だかわからなかつたんだが、

気がついたらモリ・の首をナイフで切っていた。

モリ・はパックリ開いた傷口から血を吹き上げてのたうち回つていた。

そしてそこへガキが来た。

もうやるつさやないだろ、同じよつて首をかき切つて母子共々

変質者に殺されましたつて寸法よ。

つまい具合にあいつが第一発見者。

とんだクリスマスになりましたつてわけよ。

一年たつてとうとう発狂しやがつた。

自分の耳をチョン切つて病院行き！泣けつちやうね

クリスの笑いは止まらなかつた。

その夜クリスはベットの中で自分の未来を思つてほくそ笑みながら眠りに落ちた。

この家もウイルのコレクションも、何もかもが自分の物になる。

しかし彼は確実に恐怖の世界にはまりこんでいる自分に気がつかなかつた。

今日博物館でハリソン警部に話しかけられた時に

恐怖のフラグがオンになつてゐるのだ。

自分が犯した殺人を見破られたのではないかと言う不安が、

クリスの寝ている部屋の壁にヒートの皿になつて現れた。

一つの皿は四つの皿になつ、

ぶくぶくと泡がわき出て来るよつに瞬く間に四方の壁をひじつと皿で埋まつた。

ひとつひとつの中が勝手に瞬きをする。

そしてその振動で空気が音を出す。

クリスは皿を覚ました。

部屋の中は湿つた沼の濁んだ臭いがしていた。

クリスが壁いっぱいの皿に氣づくのに長い時間はいらなかつた。

数えられないほどの中が不規則にせわしく瞬きを繰り返す、

クリスは全身の毛がぞわつと逆立つを感じた。

心臓が大きく脈打ち始める。次の瞬間クリスの視界を風が切る。

喉のあたりに衝撃を感じ、一気に冷たい空気が気管に流れ込み、

入れ違いに生暖かい液体が溢れ出た。

恐ろしいほど早く、クリスの手足から感覚が無くなつてゆく。

喉から噴水のように血を噴き上げて、床に落ちたクリスが最後に見

たものは、

鋭い爪に付いた血糊を舌で舐めているウ・の姿だった。

(闇の中の住人)

夕方四時をもって博物館は閉館した。

ドアに施錠する前に、最後の客が残つてないか警備員が巡回をしている。

この博物館にウイル博士の標本を展示してから、誰もが夜勤の警備を嫌がつた。

それでも、断ればクビになる。暗黙のうちに巡回は夕方のこの一度だけになつた。

警備員はモリ・とジョンの絵の前に来ると、溜め息を一つついてつぶやいた。

「また聞こえるんだろうな・・・話し声が」

警備員はブルッと身震いを一つして去つて行つた。

彼の足音と共に、天井に付いている蛍光灯が一本づつ消されていく。

やがてフロア・の明かりがすべて消え、完璧な闇が訪れた。

どのくらい時間が経つただろう、モリ・とジョンの絵の中から小

さな声がした。

「ママ・・・今夜もお話を聞かせてくれるのやしょ・・・」

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4718a/>

闇の中の住人

2010年10月21日20時25分発行